

として現れる。この際、必ず表題と同じになっているかを確認すること。また、1 ページ目のタイトルは右側の余白にはみ出さないように注意する。

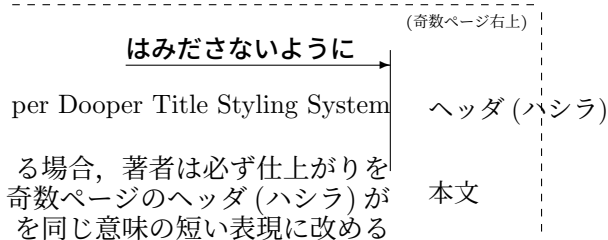


図 1. ヘッダの例

原稿を作成する場合、著者は必ず仕上がりを確認する。3 ページ以上の原稿については、3 ページ目以降の奇数ページのヘッダ (ハシラ) がページ幅を越えないように適切な長さのタイトルを付けること。ヘッダ (ハシラ) は途中で改行してはならない。また、`\journalhead{}` の中を空にしてはならない。なお、ページ番号はページ下部中央に書き込まれる。

シングルブラインド査読のため、投稿時に著者名、所属を記入すること。著者名の姓と名の間には半角スペースを入れ、著者名の区切りはタブまたは 2 文字以上の全角スペースを用いる。カンマ区切りではないので注意。所属名をマークごとに 1p 目左下「Copyright is held by the author(s).」の次の行に記入する。英文名を併記する必要はない。著者の所属が著者によって異なる場合は、上付き文字でマークをつけ、また、全著者の所属が同じ場合は、マークを付ける必要はない。

アブストラクト (論文概要) は、`\begin{abstract}` と `\end{abstract}` の間に、400 文字程度の和文で書く (英文は 2012 年で廃止)。「概要。」と概要本文の間は改行せず、一続きで書く。

2.3 本文

`\section{}`、`\subsection{}` など、スタイルクラスで用意されている章立てを用いながら、通常の L^AT_EX 2_ε 文書執筆の要領で書く。

誤字脱字や参照の不一致が散見されるなど、最低限の推敲が為されていないと判断された場合、査読を行わずに不採録となる場合がある (Quick Reject)。共著者によるチェックも投稿前に受け、十分にチェックの上投稿すること。図表については十分な画質があるように著者において出力すること。なお、写真などもすべて原稿中に組み込んで出力すること。

2.4 参考文献

参考文献は、本文で「文献 [3][4] で…」というようにカッコ書きで引用し、文末に参考文献リストを作成する。本文中では参考文献リスト中の `\bibitem{}`

をキーにして、本文中に `\cite{}` と記述することで引用することができる。

例) 参考文献リストにおいて

`\bibitem{rekimoto2000}` と記述した場合、本文中に `\cite{rekimoto2000}` と記述すると [3] と表示される。

参考文献リストは J_BI_BT_EX を用いて文献データベースから自動生成することを強く推奨する。文献スタイルは `jwiss` を使う。手書きで作成する場合には、文末の例のように著者名、論文名、所収冊子名 (英文の場合には斜体)、ページ番号、発行年を書く。英文で著者名を書く場合には、名 (first name) のイニシャル、姓 (last name) の順に書く。共著者が多い場合には「et al.」で省略してもよい。このテンプレートでは、同梱の `wiss_template.bbl` が参考文献リストになっているので適宜参照のこと。英語の文献リストの書式としては IEEE style manual が詳しい。

なお、参考文献に URL を指定する場合には、そのページが存在していることを投稿前に必ずもう一度確認し、参照日を記載する。本来、ニュース記事のように短い期間で URL が変更されたりページ自体が消滅する恐れのある Web ページは参考文献として好ましくない。

2.5 未来ビジョン

未来ビジョンについては、必須とせず任意とする。論文本体とは別に、「この研究はどういう未来を切り拓くのか」について、著者の視点からアピールしたい点があれば、最終頁に欄を設けて設けて自由に議論する。外枠の大きさはページ下余白から最大 93mm の範囲であれば、ある程度改変してもよいものとする。

3 論文作成の例

`\section{論文作成の例}` と書くと上のように表示される。

3.1 図表挿入の例

`\subsection{図表挿入の例}` と書くと上のように表示される。

3.1.1 表の例

`\subsubsection{表の例}` と書くと上のように表示される。表 1 は表の例である。

図の例

`\subsubsection*{図の例}` と書くと上のように表示される。アスタリスク (*) をつけたことにより番号が表示されない。図 2 は論文中に図面を挿入した例である。

